

俳句年鑑2015年版 諸家自選五句を読んで  
646名 角川学芸出版 2014.12.6 発行

共鳴句を挙げる。ブランク（空白）行に挟まれた  
句群は同一作者。

作者名は割愛。原著にあたられたし。

先ずは作品本位で句に対し、  
“俳句は無名がよい”  
を實踐されたし。

早苗饗にみちのくの唄低かりし

福は内鬼は外より長く言ひ

神主の八開手響く冬日和

一羽二羽十一羽とも初雀

一番に週間花粉情報欄

父急逝退学覚悟の田植だった

硝子戸を登りきれずに冬の蜂

動かねば山のしかかる寒の鯉

椿とは人を見つめて咲く花か

桜咲き呆け老人をよろこばす

父の日や妻無く子無く空仰ぐ

竹の秋老いの気ままも許されて

海鼠には最悪の日でありにけり

三歳はみな羊なり聖夜劇

釣竿をためす流れや合歡の花

ひかげの身ひなたの心石露の花

つつしんで申し上げます明日は秋

火をつけて水を使へば初明り

伊勢のこと遷宮のこと年惜しむ

右筆を祖とし白梅薫りけり

竹落葉戯れて足るやうに散る

ごろすけほう観音さまが生れるぞ

父焼きし野辺のはづれの葦草

もろこしを齧る齒形の几帳面

長き夜のともしびは母辞書は父

てのひらに残ってゐたる柿の冷

花冷えの五重塔に心柱

日脚伸び寄道多き京となる

草結ぶ遊びも廃れぬのこ草

湯たんぼの慈母のごときを足蹴にす

木々の芽の一斉蜂起谷戸日和

はや気配してをり新しき巣箱

天高しわが名に父母の一字づつ

木枯や力つくせと母のこゑ

一途なるもののははれに轉れり

寒ければ各自我慢のうえ集合

お遍路の冬あたたかきことを言ふ

くるぶしの清々しくて草いちご  
そのへんのぼんやりとして蚊遣香  
木漏れ日は踏むもの夏の落葉して

うぐひすのいのちさきはふ初音かな  
一粒にて売れさうな大春莓  
をりをりに飛ぶ蟬見えて蟬時雨

一匹となりし金魚を見守りぬ

鮎釣りの根ンよき一人瀬を爰へず

片陰を拾ひて四天王寺かな

海青し船虫どもが走ること

夜光虫の水をのばして見せにけり

春大根抜いてくれろと云はむばかり

ナイターのとどめの襍打の転々々

庭に降り立ちて夜桜朝桜

昼寝覚この世の水をラツパ飲み

涼しさに居て涼しさを忘れぬし

ありたけの冬日をためて雑木山

うすもみぢうすうすもみぢにも小雨

貝になりたくて汀へ散るさくら

吠えずなつかず木犀の下に坐す

もう一度鳴いてそれより夜の蟬

しんしんと寒の底ひを紙屋川

昼寝覚雀の声の新しく

なんとといふ大きな月の出づるかな  
去年今年うらやましきは汝が未来

片陰や膝いそがしき三輪車

赤松は走り根も赤加賀の秋

としよりの出る幕ならず花すみれ

雪よりも少し汚れて雪兎

枯れしこと忘れて一樹立ちつくす

年の夜のみしりみしりと当主なり

初鏡この顔で押し通すかな

白靴やもう落ち着いていい齡

買初の靴なり前途三千里

溶けてゆくほかなき時を花氷

全身で受けとめてゐる大花火

黄梅やこの世微醺で終りたく

この風の果ての果てまで薫るらん

極道と句道の似たるはるがすみ

昼ごろに一人通りし深雪かな  
短夜の雨音にとり巻かれたる

風船売銀座の空気入れてをり  
よろこんでもらへる人へ蕪抜く

月光のしんしんしんとうみに降る  
小鳥来て森にミュージカルの立ちぬ

毫碌の字を確かめて籐の椅子

谷に猪眠たいときは眠るのです

蒟蒻玉在の生まれを誇らしく  
暖房車お国言葉になつてゆく

梅は横すももは縦へ花の枝

甚目寺駅踏切飛んでいぼむしり

動けざるわれ故あはれ妻の汗  
戦には行くな草矢で遊べ子ら

白鳥の首をぐにやりと水より抜く

ひよんの実を掌にころがしてまだ吹かず

新蕎麦の大盛とんと置かれけり

寝たきりのらくだ勤労感謝の日

雪晴の谷川岳をさらけ出す

万歩計つけて見てゐる火事場跡  
道場の畳に春の来てゐたり

水音に身を泳がせて鮎を釣る

乳張って牛の泪目桃の咲く

診察券ポインセチアの横に出す

梅雨に入る小名木川より隅田川

両隣声かけあひて雪を掻く

左手はひだりの役目西瓜切る  
運動会時に不発のピストルも

貧しさの戦後の色よ紫蘇畑

阿弥陀くじ買物役の月夜かな  
何匹か居なくなりたる虫図鑑

鮎鱺鍋食べ朽ち舟のごと眠る

涼しさの風のゆくへは目のゆくへ

疾駆する脚の太きよ羽抜鶏

百合の揺れ大きくゆるく一度きり

施餓鬼幡海辺へ運ぶ間も吹かる

煎餅を袋のなかで割る夜長

海鼠腸や降り始めたる雨の音

すててこもシャツも夫の香星月夜

初蝶の越えぬ高さのありにけり

ふくろふの闇深ければ深く鳴く

賀状書く硯の海に灯が点り

短夜をさらに短く軒雀

極月や川の左右に生活の灯

七歳と五歳と名のり青き踏む

今日も雨八百屋に猫と筍と

赤とんぼ都電過ぎたるあちにまた  
ありさうな処にありぬ蟻地獄

少年に雄ごころ育つ松の芯

当り鉢伏せてありたる夜長かな  
寒波二波三波花屋に花あふれ

思ひきり飛び込んでみよ雲の峰  
身に沁むや路上を叩く雨の音

密密と木犀みつみつと匂ふ  
末枯を奔れる水音弾みたり

手放せぬ洗ひざらしの夏帽子  
いはれなど知ったところで心太

春が好き音で読んでも訓読も  
人の世はこんなものかも蜃気楼

立ち消えてゐること言はず火桶に手  
睡蓮を見てモネ思ふそれも陳腐

蝸牛地球は丸いと知るや君

またぐらをよろこぶ老いし猫の冬

ゆく鳥の目はさきをゆく秋の空

陸はいま花の中なり接岸す  
噴水の雨凌がんとして高し

マスクして何を考へても自由

二階には春の火鉢と風音と

車庫入れのやうに泳ぎし金魚かな

秋風やずんずん遠き歩荷の荷

さみどりのはちすのうてなから曇る

押しのけるやうに青梅太りけり

直弟子の減ってゆくなり誓子の忌  
赤い羽根素直に募金してゐたる

雛壇に加へたき子が雛の前

あかり消すことがもてなし月見酒

焼かれつつことりと傾ぐ榮螺かな

春めくや枝先はみな紅さして

脱ぎしものくたくたとある大暑かな

臥す人の横にねむりて扇風機

雲近くなるまで登り梅の花

花野より獣のごとくオートバイ

裸子としての輝き甘茶仏

灯をへらし言葉をへらし涼しく居

花探る芭蕉の伴をして見たき

水脈曳いて花見顔なる夫婦鴨

まだ信じきれずに扇子半開き

漁火に遅れてまばら芒種の灯

大花野風踏むやうに歩きけり

面影の先生と酌み初諸子

針供養夕焼空が海を染め

破蓮や枯れゆくものに音のなく

何思ひをるにやなめくじり這ふ

古芦の高く青芦まだ低く

波音になじみ過せり三が日

雨を来て夏炉の生(なま)の火に当たる

天に満ちやがて地に満ち雁の声

寄居虫の宿も店子も岩の色

ねぢばなの螺旋数式ありさうな

兜虫床を叩きて戦はず

秋晴の床屋の内のあからさま

咳一つにも注目の新主宰

福寿草亡き人すこしづつわすれ

つかみてはまだあたたかき鬼の豆

風船に薬局の名や膨らます

としよりにひととせ迅し十一月

花火の夜戦中戦後へと咄

鏡台に貼りつく老いてゆく寒さ

三月の君は何処にもゐないがゐる

麦の秋どのひと粒も海に朽つ

絵にならぬ松を見てゐる端居かな

颯爽とおたまじゃくしに後る脚

蔓引けば何か用かと烏瓜

大学に黴を育ててゐたりけり

病院で病人になる二月かな

火が草へうつり西日にとけこめり

馬の背の花びら風に入れ替る

間違へて生姜畑の前にある

露の臺跳べるほどなる野の流れ

リハビリも早三年や柿の花

神棚の下民宿の蒲団敷く

線香を手風にて消し魂祭

クリスマスは人の渦僕泳げないんだ

カニ食べて傷ついたお正月のゆびさき

鹿の声聞きたきと灯を消しにけり

打水に今日の気合もうかがへて

合歓咲いて雨に安心してゐたり

はじまりを知らぬも蟻の道らしく

俳人にわかる声して亀鳴けり

寒禽の二三羽碍子かと思れば

新宿の冬青空にさされ佇つ

秋晴やこちらは富士の見えぬ席

夏負けて古き映画を観てをりぬ

雪こんこななどとは言うてをれぬほど

この雪を鳩はつむりにのせてをろ

雪暗れの船の寄らずにゆく港

柚子ひとつ渡す言葉を託すごと

傘開く時の快音男梅雨

水はしる棚田の早苗ぐもりかな

啓蟄や馴染みし靴の不恰好

遠足の列は余さず森に入る

とりあへず順風と書く新日記

行水のどこから洗ふ赤ん坊

忙しさうな仏の千手昼蛙

何にせよ生きねばならぬ暑さかな

書店出て手に金粉の松の内

真ん丸の蕾ををれぬ梅日和

風知草いかにおはすや原節子

夏蝶の纏れほじくや俄か雨

振り向きて近づきて冬桜かな

蓮枯れてとぼけた姿晒しをり

長生きや春あけぼのを目覚めぬて

南風強き夜や羽田田滑走路

花ふぶき水から顔を出す鳥へ

栄螺からふとどきもののごとき腸

毛糸編む母が昔の顔をして

朴の芽を活けて会津の鯨鉢

紅梅に立つ遠からず近からず

三日もお前どこに行つてたうかれ猫

良寛のひらがなたちと春惜しむ

われもまた後ろ盾なき涼しさに

金箔を置く秋冷のやうにかな

船の名に呼ばれて祈禱初不動

百千鳥木屑払ひて仏師立つ

脱稿の身ののびのびと良夜かな

退院に続く通院秋ふかむ

分校の春オルガンのふがふがと

月の出の風鈴じつとしてをりぬ

靴篋を使ってバレンタインデー

平和久し春風に乗る飛行船  
白牡丹一茎に部屋あらたまる  
所望せし冬瓜抱いて妻戻る

定量のあるかに止みぬ初夏の雨  
男伊達女伊達ともサンングラス

人來れば喜ぶ犬や冬山家

節回し佳き男衆一番山車

寒梅の日向に人の入れ替る  
鳩は歩み雀は跳ねて草萌ゆる

探梅や日にふくらめる海に沿ひ

羽抜鷄走ればこわいもの知らず

癒ゆるとは春の大地のふかふかす  
鉛筆のころがつてゐる夏休

香水一変自由が丘で乙女乗り  
重ね着を重ね脱ぎして弘法湯

紙魚の書となりて楸邨句集かな

鍋囲む席一つ減り年暮るる

ノートみな途中で終り秋灯  
別るるに手を振るならひ鳥雲に  
ひとおよぎさせて掬へり新豆腐

林火忌に従ふごとく松崎忌

編む音のすでに涼しき葭簣かな

蒸鯛の赤きはだへも弥生かな  
起き抜けの己に言へりおお寒と

往年のしこな知らねどちゃんこ鍋  
縮尺の東京駅や花曇

老いもいる新人研修夜を濯ぐ  
呼鈴に応える犬や立葵

昼寝覚くみたて悪き骨のかず

散骨や共に\*さよりを釣りし海

珠入れし母貝を癒す葉月潮  
縫初や含めば甘き木綿糸

点ひとつ打って校了ところてん

競り合へるランナー寒き肘振って  
ばちばちと鉄条網をなぶる野火

風花を片寄せてゐる摩天楼

吸入酸素E3(りふべ)三円冴返る  
蝌蚪の紐の罅(とぐろ)黒々いい天気  
可然(しかるべく)仕りたる昼寝かな  
浅草やゝ(ちゆ)ゝ(ちゆ)と泥鰌の浮き沈み

木下闇孔雀の緑青と化し

青空を目指して滝の直立す

解散の前の整列森五月

遠いさびしき百葉箱の夏芝は

啓蟄や快速電車山を抜け

あこのころの祖母に近づく桃の花

夕闇が下りる胡桃の花づたひ

一旦は暝（つぶ）り大きな鼻の眼

神域や房のままなる杉落葉

とこうして今年の栗の渋皮煮

極楽寺在るがまま古るあたたかさ

冬夜の馳走煮込んで煮つめて透けた大根

以上